

# 国際シンポジウム「アジアの経済統合における 中小企業の役割：メコン経済圏を中心に」の成果と内容

アジア共同体研究センター長

桐 生 稔

ASEANにおけるCEPT, AFTAの進展と、中国とASEANとの経済関係の拡大などを通じて東アジアの経済連携は急速に進んでいる。こうしたなかで05年12月に開かれたASEAN+3の首脳会議では「アジア共同体」実現に向けての重要な一歩となる宣言（クアラルンプール宣言）が発表され、東アジアの経済統合が現実的なものになりつつある。

本学経済学部では、東アジアの経済統合の可能性とそれを阻む諸問題についてアジア各国の研究者と共同で研究したいと考えていた。そのためORCスキームによるプロジェクトを提案、05年度より文部科学省より認可を得て、「アジア共同体研究センター」が設立された。

本シンポジウムはまさにこのORCスキーム提案の礎として位置づけ、アジア各国からの専門家を集めて討議を試みたものである。

シンポジウムではGMS（大メコン圏）の実態と問題について各国の専門家からの報告を中心にして、関西在住の企業家、専門家、本学院生の参加を得て活発な議論が行われた。

議論の内容について以下のように要約した。

## アジアにおけるGMSの位置づけ

メコン川はかつてアジアの共産主義国家とそうでない国家とを隔てた壁としてあったし、流域は内戦と反乱軍の跋扈する無政府地帯でもあった。しかし、ベトナム戦争の終結、中国の現代化政策の進展、カンボジアの内戦終結さらにはミャンマーにおける「ビルマ式社会主義」の崩壊などを受けてこの地域を取り巻く政治・社会環境は急速に変化した。とくに90年代に入ると流域諸国が、こぞって市場経済化をめざし、ベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマーのいわゆるCLMV諸国がASEAN加盟を果たしたことによって、メコン川流域諸国が「戦場」から「市場」へと変貌し、東南アジアと中国经济とを結節する役割を果たし始めた。

産業構造の高度化と貿易の促進によって高度成長を続けるASEAN先発諸国にとってこの地域は、あらたに開放された市場としてまた、投資先として注目される一方、中国とくに雲南省経済の東南アジアへの進出の足がかりとなり始めている。アジア開銀（ADB）

およびESCAP（アジア太平洋経済社会委員会）が中心となって進めてきた各種のメコン川流域開発計画は90年代に入って、日本、タイ、中国からのODAあるいは民間資金も導入されて本格化するとともに、道路、水運、電力、水資源など多様な多国間開発が進展している。このためGMS域内の貿易量も年々拡大し、様々な域内開発の枠組みも制定されている。

GMSは一種の局地経済圏ではあるが、この地域の発展は東南アジアに止まらず、中国とりわけ雲南省などの内陸部、さらには南アジア諸国との経済関係が、この地域を通じて連結し、拡大する可能性が高く、アジア経済の発展にとっては重要な意義がある。

本学におけるシンポジウムでは、こうした状況を踏まえてGMS域内で進展し始めている多国間産業連携の実態を明らかにするとともに、とくに域内諸国の中小企業（SMIs）の実態および役割に加え、中小企業の多国間連携の可能性について議論した。

#### シンポジウムにおける議論の要旨

シンポジウムには、タイ、ミャンマー、ラオス、ベトナム、中国・雲南省などGMS諸国の研究者が参加するとともに、上海交通大学（中国）、ハンバット国立大学（韓国）、トリブバン大学（ネパール）など本学と学術交流協定提携大学からの研究者およびADBのGMS担当官が出席した。

本学経済学部長高増教授は、「アジアの経済統合と日本の役割」について報告、このなかでアジアの経済統合を促進する役割として、アジア諸国とのFTA締結を出来るだけ速やかに行うことが重要であると指摘、しかし、アジアの経済統合は「経済理論の観点からはメリットを見出すことは難しい」とした上で、「むしろ政治的、社会的効果を望める」と主張した。これに対し、ADBのエコノミストJin W Cyhn氏はGMSにおける各種の開発計画を紹介し、とくに中小企業の多国間連携のための枠組みが進んでいることを指摘して「GMSはアジアにおける経済連携のひとつの試作モデルである」と述べた。

タイ国首相府副大臣Dr. Kitti Limskul（チュラロンコーン大学経済学部休職中）はGMS諸国におけるタイ政府および民間部門の役割、とくに中小企業発展のための可能性について論じた。このなかで「GMS諸国間の産業連関表を作成すること」を提案し、「それに基づいて各国の優位産業を見出し、産業間の“水平的、垂直的統合”の形成を目指すべきだ」という注目すべき課題が提案された。

ミャンマーの商工会議所副会頭U Zaw Min Winは、GMS開発計画におけるミャンマーの貢献について概略し、GMSの進展がミャンマー経済の発展に極めて大きな要因となっていることを強調した。とくにGMS域内で機能し始めた各国商工会議所の調整会議であるGMS-BF（GMSビジネスフォーラム）により各国の中小企業間の連携計画が協議され

ていることが指摘された。

ラオス国立大学教授Dr. Khamlusa Nouansavanhは、ラオスの中小企業の実態と問題点について報告、AFTAの完成はラオス経済の発展に効果的であり、貿易と投資の拡大をもたらすが貿易収支のインバランスは増加するとして、政府に対して「輸出指向型中小企業の育成を奨励すべき」との政策提言を行ったなどと述べた。そのためにどのような政策を採り、制度や規則の変更をすべきかについて詳細に報告された。

中国・雲南大学国際学院講師の畢世鴻氏は、「GMS開発協力における中国雲南省の役割」と題して雲南省にとっての開発協力の実態とその効果について論じ、GMS計画が進展することによって「東アジア・東南アジア・南アジアを連結し、太平洋とインド洋をリンクする巨大な国際通路」となり、「雲南省が21世紀の中国対外開放におけるひとつの窓口として、メコン経済圏ないしは中国—ASEAN自由貿易地域における重要な地域的貿易・金融・情報センターになることも予想できる」と指摘して、将来のアジア共同体へのモデル効果が期待できると結んだ。

上海交通大学・安泰管理学院・経済金融学部助教授のMs. Xi JunfangはCAFTA（中国・ASEAN FTA）の構築におけるGMSの役割と問題点について中国経済からの視点で分析した。GMSの進展はCAFTAの構築をスムーズにし、さらには東アジア全体の経済統合に大きな効果をもたらすと指摘した。

このほか、ベトナムのホーチミン経済大学講師Dr. Nguen Hoang Bao氏はベトナムの経済発展における租税の帰着と役割について発表し、オブザーバーとして招待されたネパールのトリブバン大学経済学部長、教授Dr. Madan Kumar Dahal はGMS諸国の経済的特質につき分析し、諸国間にある政策や制度の相違を乗り越えることが問題であると指摘した。また、同教授は最後に「GMSは、中国とタイの参加によって21世紀における“New Economic Civilization”を維持する壮大な機会となる」と結んでいる。

なお、コメンテーターとして韓国からハンバット国立大学のRyu, Byong-Ro, Lee, Choong Ho両助教授が参加して、GMSの進展が東アジアの経済統合に一定の役割を果たしているとしながらも、「重要なのは中国、日本、韓国が東南アジア諸国とのFTAを速やかに進め、アジアの自由貿易を加速化させることである」とコメントした。

クロージング・リマークスにおいて本学経済学部の坂東慧客員教授は、「地域経済圏としてのGMSの実態と問題を解明するためには経済学的アプローチだけでなく、政治、社会、文化的な研究も進めるべきであり、共同体へのハードルの所在を究明するためにも社会学や文化人類学の分野も視野に入れる必要がある」と指摘した。

以上

注：ミャンマーのU Zaw Min Winに通常の敬語をつけてませんが、ミャンマーではUがMrの意味です。

(追記)

1) シンポジウム、プログラム

## 「アジアの経済統合における中小企業の役割：メコン経済圏を中心に」

### 趣旨と内容

ASEANにおけるFTAの進展、中国とASEANとの経済関係の拡大などを通じて東アジアおよび東南アジアの経済統合が急速に進みつつある。こうしたなかでアジア地域では産業の多様化が進み、各種の中小企業とりわけ製造業部門での中小企業の発展が見られ、それぞれの優位性に基づく産業のシフトが進み域内の分業が形成されつつある。日本からもアジアへは、80年代後半からは多様な中小製造業の進出が見られ、さらには90年代に入って中国への進出が急増している。このシンポジウムでは、こうした日本からの中小製造業がそれぞれの国の産業および経済発展にどのような役割を果たしているのか、また域内の経済統合にどのように関わってくるのかについて分析する。このテーマに基づきASEANと中国経済が実態として直結している「大メコン経済圏」地域を対象として関係各国の専門家、アカデミックスによる議論を行い、さらには産学提携の促進を図るために地域社会における企業家および経済界の参加をもとめ幅広い交流を行い、本課題の討議が実りあるものとなるよう配慮し、アジアへの関心を高めることとする。

### プログラム

9:30	受付 (Registration) 開始		
<b>午前の部 (First Session) (10:00~12:10)</b>		議長 大阪産業大学教授 桐生 稔	
10:00	開会挨拶	大阪産業大学学長 瀬島順一郎	
	各界祝辞・参加者の紹介		
10:30~11:20	アジアにおける経済統合の実態と問題		
	「アジアの経済統合と日本の役割」		
		大阪産業大学教授 高増 明	
	「アジアの経済統合の事実及び問題点」		
		上海交通大学助教授 奚 俊芳	
	コメント、質疑応答		
11:20~12:10	GMSの開発状況と問題		
	「大メコン圏：中小企業の発展」		
		アジア開発銀行エコノミスト Jin W Cyhn	
	コメント、質疑応答		
12:10~13:10	=Lunch Break =		
<b>午後の部 (Second Session) (13:10~16:30)</b>		議長 大阪産業大学教授 桐生 稔	
13:10~15:20	アジア諸国の経済統合への対応と中小企業		
	「大メコン圏の経済統合と中小企業の役割」		
		タイ国首相府副大臣 Kitti Limskul	
	「アジアの経済統合と中小企業：ミャンマーのケース」		
		ミャンマー商工会議所副会頭 Zaw Min Win Z Zaw Min Win	
	「ベトナムにおける租税の帰着」		

国際シンポジウム「アジアの経済統合における中小企業の役割（桐生 稔）」

		ホーチミン経済大学講師 Nguyen Hoang Bao
		「ラオスの中小企業と地域経済統合」
		ラオス国立大学教授 Khamlusa Nouansavanh
		「大メコン圏における経済協力と統合：一考察」
		トリブバン大学教授 Madan K. Dahal
	コメント	ハンバット国立大学助教授 Ryu, Byong-Ro
		ハンバット国立大学助教授 Lee, Choong Ho
		質疑応答
15:20～15:30	= コーヒー・ブレイク =	
15:30～16:00	中国と東南アジアとの経済統合の可能性	
		「メコン経済圏開発協力における中国雲南省の関わり」
		雲南大学講師 畢 世鴻
		コメント、質疑応答
	閉会挨拶	大阪産業大学経済学部客員教授 板東 慧
16:10	終了	

## 2) 報告者紹介

**Kitti Limskul** 首相府副大臣, 元チュラロンコン大学助教授

チュラロンコン大学経済学部卒業, タマサート大学経済学修士。日本へ留学後, 名古屋大学で経済学博士号を取得。専門分野は計量経済学。チュラロンコン大学経済学部講師を経て経済学部助教授。政府委員を歴任後, 2002～2003年に財務副大臣, 首相府副大臣を経て, 現在は文部科学省副大臣。

**Madan Kumar Dahal** トリブバン大学(ネパール) 経済学部教授, 経済学部長

経済学修士(トリブバン大学), 経済学博士(ボンベイ大学)。トリブバン大学講師, 助教授を経て, 1991年から経済学部教授, 経済学部長。ネパール財務省などの委員を歴任。1996年にアメリカ・コロラド大学客員教授。専門は, 財政学。

**奚 俊芳 (Xi Junfang)** 上海交通大学・安泰管理学院・経済金融学部助教授。

上海交通大学経営学部卒業。上海交通大学で経済学修士取得。会社勤務を経て, 上海交通大学講師から助教授。研究分野は, 国際貿易政策, 貿易ビジネス, マーケティング。学部では, 国際貿易政策, 貿易戦略を講義, MBAコースでは, 国際ビジネスを担当している。2001年にカナダのプリティッシュ・コロンビア大学に半年間滞在。最近の論文としては, 「中国と東アジアの相互作用: 経済学的考察」などがある。

**畢 世鴻 (Bi Shihong)** 雲南大学国際関係学院講師

国際関係学院(北京)卒業(日本語・文化学士)。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科修了。国際関係学修士を取得。メコン川が流れる中国・雲南省とメコン経済圏(中国(雲南省), タイ, ミャンマー, カンボジア, ラオス, ベトナム)の関係について研究。

**Nguyen Hoang Bao** ホーチミン経済大学講師

ホーチミン経済大学経済学部卒業。オランダの社会科学院で修士号, 日本へ留学し, 大阪産業大学で経済学博士号を取得。専門は, 計量経済学, 最近の論文に, 「外国資本と経済成長: マレーシア, タイ, ベトナムの比較研究」 「投入産出モデルの産出, 所得, 雇用の部門間連関に関する分析への適用」などがある。(報告原稿は他誌に掲載のため, 本誌からは割愛)

**JIN W. CYHN** アジア開発銀行エコノミスト(担当 メコンの統治, 資金調達, 貿易)

経済学修士(ケンブリッジ大学, 開発論), 経済学博士(オックスフォード大学, 開発経済学)。オックスフォード大学, イェール大学などで教鞭をとった後, アジア開発銀行に入り, 東アジアの発展途上国の中小企業, 金融, 技術移転, メコン経済圏などを担当。専門は, 東アジア経済論, 発展途上国への技術移転など。

**Ryu, Byong-Ro** ハンバット国立大学校環境工学科助教授

忠北大学工学部卒業。工学修士(忠北大学, 水資源開発), 工学博士(忠北大学, 環境工学)。韓国科学技術院の研究員を経て, ハンバット国立大学校助教授。専門は環境工学, 水資源開発。

**Lee, Choong Ho** ハンバット国立大学校情報コミュニケーション・コンピュータ工学科助教授

延世大学卒業，工学修士（延世大学）。日本の東北大学に留学して工学博士を取得。韓国テレコムのマルチメディア・ラボラトリーの研究者を経て，ハンバット大学校助教授。専門は，コンピュータ・サイエンス。

**Khamlusa Nouansavanh** ラオス国立大学教授，学部長

専門は経営管理，ラオス経済とASEANの関係など。最近の論文としては，「ラオスにおける統合の枠組みとASEANとのより密接な統合の将来像」がある。

**Zaw Min Win** ミャンマー商工会議所副会頭

ヤンゴン大学卒業。ヤンゴン大学で修士号取得（科学）。Trade & Industrial Development社，Myanmar Industrial Holding社社長。ミャンマー商工会議所副会頭，ミャンマー工業会副会長。

**高増 明**（Akira Takamasu）大阪産業大学経済学部教授，経済学部長

京都大学経済学部卒業，経済学博士（京都大学）。大阪産業大学講師，助教授を経て経済学部教授。専門は国際経済学，数理経済学。著書に『国際経済学：理論と分析』『経済学者に騙されないための経済学入門』など。

**桐生 稔**（Minoru Kiryu）大阪産業大学経済学部教授

アジア経済研究所経済開発分析部長，中部大学教授を経て，大阪産業大学経済学部教授。専門はASEANの政治・経済分析。著書に『ミャンマー経済入門』『国境貿易』など多数。